

ない混沌、新奇を狙いすぎるための不可解な喘ぎみたい」と書いているけれど、これは、あの想像力にとんだ天才的音楽家にとっても、自分がそうしてほしいと思っっているのと同じものを他人にも許すのがどんなにむずかしいかの見事な例である。

ベートーヴェンは多くの同時代人に畏怖と嫌悪の入り混じった気持ちをかきたてたらしい。ロッシニにいわせれば「ハイドンがすでに奇妙な和音、不自然な楽句、大胆な新奇の採用で、様式の純粹さを台なしにしはじめていた。(略)そのあとクラマー、最後にベートーヴェンが統一や自然の流れを欠いた、恣意的で奇怪な作曲をして、器楽の様式を完全に墮落させた」のだった。全文引用できないが、これを読むと、彼にとってハイドン、ベートーヴェンは理解の外のものであり、逆にそのことで彼は自分の長所を保持し磨き上げられたことがわかってくる。

(3・20)

指揮者ジョージ・セル

「今年はジョージ・セルが死んで二十年。ついでは何か書いて」といわれ、短文を書いたが、短くて言いたらない。この欄でもう一度書かして頂く。重なる言い方も少し出るかもしれないが、御容赦下さい。

六〇年代アメリカをはじめて訪れた故斎藤秀雄は「あすこで大指揮者はセルひとり」といつていたが、たしかにセルこそは今世紀を代表するトップクラスの指揮の大家の一人だったのは間違いない。

では、どんな具合に「大家」だったか？

かつてマネはベラスケスのことを「彼こそは画家にとつての画家」と評したけれど、セルは正に「指揮者にとつての指揮者」と呼ばれるにふさわしい人だった。彼はまず最も玄人好きする人であり、完璧な指揮の技術を身につけた名手だった（斎藤氏こそ指揮の技術の完成ということを追求し続けた人だった）。「指揮に技術なんかいらぬ」という説もあり、それも一理あるのだが、曲によつてはすぐく合わせにくい音楽のあるのも事実で、そういう時「気持ちだけ」ではオケを動かせない。セルの指揮したR・シュトラウスの《ドン・キホーテ》《ティル》などをきいてみませんか。快刀乱麻を断つとは正にこのことという感がする。

一九七〇年の五月大阪の万国博に二十何年間手塩にかけたクリーヴランド管弦樂團をつれて公演に來た時、彼は体内に死病を抱えていた。万一を考えて、ピエール・ブレーズが同行した。そうして記者会見の席で記者からセルと彼との關係をきかれた時、ブレーズが「我々二人は完璧に對する熱狂と責任感を共有するが、好みは正反對だ」と答えたのを、私は今もはっきり覚えてゐる。

至言である。しかし「完璧への熱狂に憑かれた芸術家」はとかく激情にかられて事に処したり、きき手を遠い夢幻境に誘うといった仕事ぶりはしない。だから、とかく情熱がたりず、夢がないといわれる。ベラスケスも、セルもそうだ。だが、セルのは肌ざわりこそたしかにひんやりとしているが、滑らかで底光りする光沢があり、形はあくまで厳しい均整美に徹している点、宋代の陶磁器の名品に共通する。彼が二十年前日本できかせてくれたモーツアルトの三十九番変ホ長調や四十番ト短調の交響曲はその典型。一点のゆがみもゆるみも前のめりの急ぎすぎもなく、端然と進み、朗然と歌うなかで、あんなに気品と雅致にみちた演奏は、以来、二度ときいたことがない。いや、セル自身だって、いつもああはいかなかったのではないかと思う。

彼のは、日本人好みの不均整なゆがみやざらつとした手ざわりの茶碗と正反對の堅さ。一点一面もゆるがせにしない楷書のようなものだったから、何か近よりたい感じを与えもした。威圧感もあつて親しみにくい。これは日本だけでなく、ヨーロッパにもそう感じる人が少なくなかった。私はヨーロッパの大交響樂團の樂團長が「セルはすごいけれど、きき手を幸福にしない」と

いうのをきいたこともある。でも、あの犯しがたい気品！

もう一度ベラスケスをもち出すけれど、K・クラークが「絶対音感をもった音楽家がいるように、ベラスケスには空間性（位置）と色彩についての絶対感覚があったようだ」という意味のことを書いていたが、セルには管弦楽の音のバランスと強弱の配分について、本能的というか生得というか、いつもそれで的確にパースペクティブを構築する感覚が具わっていたみたい。

それが最もよく出ていたのは彼のベートーヴェン。線が明確で、一糸乱れぬリズムと和声の流れがあるばかりでなく、響きのつみ重なりから奥行き深い遠近感が生まれてくるのだ。その最高の例が『エロイカ』。音楽をきいて、あんな深く厚い時の流れにふかぶかと身体を浮かべ、心をひたしていたことはない。もしかしたら、セル自身も、あの時いつもの自分を乗り越えた至芸をきかせたのではなかったろうか。

こう書いてくると、セルは何か人間離れしてしまうが、あの人は独裁者型ですごい癪癪持ちだったらしい。グレン・グールドがまだ演奏会でひいていたころ、彼と協奏曲をやることになり、練習をやっていたら、グールドが例によって、足を短く切った変な椅子をもって来させ、手袋をぬいだりはめたり、妙な姿勢でひいたり何かして、なかなかはじまらない。それを横目で苦い顔をして見ていたセルは、そのうち我慢しきれなくなって、指揮を助手にまかせ、自分は客席に坐ってしまった。そうして恐い顔をしてきいていたが、終わると、いかにも苦々し気に「あいづは変人だが天才だね」と言いすてってしまった。以上真偽のほどは保証できないけれど、

ありそうなことではある。同じグールドと顔を合わせたバーンスタインが練習で大喧嘩をした末、本番の直前聴衆に向かって「この演奏のテンポは独奏者の好みできめたもので、私の本意ではない」とことわりはしたが、ともかく終わりまでやったというのと、いい対照である。

セルにはユーモアがあった。それは前にふれたシュトラウスにも感じられる。ただそれは大人の渋いユーモアであって、甘ったるくて表面的くすぐりを狙ったところは全くない。いつも一抹のながみが混じったものだ。

彼はまた完全なヨーロッパ型国際人だったけれど、祖国の音楽家ドヴォルジャークなどをやる時は、ほかでは感じられない哀愁の影が仄かにさしてくる（第八交響曲の第三楽章とかスラヴ舞曲の幾つかとか）。

逆に彼のマラーは、なぜか、あんまり記憶に深く残らず、シューマンその他のロマン派も比較的不向きだったようだ。その中では、人はあんまりいわないけれど、セルのブルックナーはよかった。第三番二短調交響曲など、「こんなにきよらかなブルックナー」はほかにどこにあるだろうと思う。

セルは日本から帰って、二カ月ほどして死んだ。七十三歳だったという。

（4・17）

付記 先月の展望で、私はベートーヴェンの手紙の訳にふれた。ベートーヴェンはその中で「アレグロというのは元来は『快活に』といった意味だったのに、いつか速度についての記号と

して扱われるようになり、本来の意味と逆の使われ方まで出る始末だ」と批判していた。その個所の訳で《音楽のことば》（哲学書房）と《ベートーヴェン書簡選集》（音楽之友社）の訳を比較引用した際、後者に原文を忠実に伝えてない点があるのに、あたかも私も同意見であるかのようになり「こちらはわかる」と書いた。あの折も書いておいたように、これは有名な手紙で、その文意は、アレグロというイタリア語が「快活に」を意味していることと同じように、私も昔から知っていた。それをこう書いたのは、私の粗忽な読み違いがもと。それを指摘して下さった西本晃二氏に感謝し、訂正します。

舞台人 ゼルナーの死